

# ザンビア農村部における豪雨ショックの資産動学への影響 -飼育牛の頭数変化に関する検証-

三浦憲<sup>1</sup>, 菅野洋光<sup>2</sup>, 櫻井武司<sup>1</sup>

<sup>1</sup>一橋大学, <sup>2</sup>農業・食品産業技術総合研究機構東北農業研究センター

## 要旨

アフリカ農村部において、牛に代表される生産資本の蓄積と取り崩しは、変動する所得に対して消費を平準化するための生存戦略の中心であると考えられてきた（バッファーストック仮説）。しかしながら、この仮説を検証した先行研究は一貫した結果を提示していない。これに対する説明として、近年の資産動学に関する既存研究は、相対的に貧しい家計は消費を平準化するよりもむしろ、生産資産を平準化する可能性を示唆してきた。しかし、これに関する実証的証拠も非常に限られている。

本稿は、期初の資産水準によって平準化行動が異なるという既存研究からの示唆を考慮に入れ、牛に関するバッファーストック仮説を再検討する。そのために、まず資産変動に関する感応性、ならびに復元力に対して計測可能な定義を与える。ここでは、感応性をショックの家計資産への影響の深さと定義し、一方、復元力をショックからの回復速度として定義した。

次に、本稿は最も早魃の被害を受けやすい地域の一つであるザンビア南部州の農家家計から成る高頻度パネルデータを用いた。このデータは、2007年から2009年の間に集められているが、調査地においては稀な豪雨の年を含んでいる。分析では、牛の頭数変化に着目してパネル推定を行うことで、資産平準化と消費平準化を分ける資産保有水準が存在するか否かを検討し、さらに、それぞれのレジーム毎に豪雨ショックに対する資産の感応性の決定要因を推計した。

結果は、家計の感応性はショック以前の牛保有頭数に依存していることを明らかにし、このことは資産における動学的な複数均衡の存在を示唆している。しかし一方で、洪水が起きた年に牛を保持した家計は、次の年に遅れる形で豪雨の影響を受けている可能性も明らかとなり、資産動学と経済階層移動の長期的な関係性への示唆を与えた。加えて、本稿はレジームにより、感応性の決定要因が異なっていることを示した。